

地域が変わる—— 地域活性化の現場

## 湖東地域

©まんなかの会 ▶ <http://mannakanokai.jp/>

# 大胆な発想で風を起こす「まんなかの会」。 地域を愛する“自由人たち”が取り組む 着地型ツアーが近江ファンを着実に増やす。

老舗料理店や日本酒の蔵元、宿泊施設の経営者、さらには古刹の住職。近江八幡を中心とする湖東地域の文化や歴史を愛する人たちが、近江の魅力を全国へ伝えようと自発的に結成した「まんなかの会」。現地の目線で発想した着地型の手づくりツアーを軸にさまざまな事業が、近江ファンを増やし続けている。それらの取り組みが、びわ湖ビジターズビューロー知事賞や旅行ペンクラブ賞の受賞につながった。

## 近江の文化の深さと出会う 「価値ある事業」を手掛ける

名付けて「蘇る戦国の美味・安土饗応膳」。1582(天正10)年に織田信長が徳川家康を安土城に招いた際のもてなし料理140品のうちから34品を復元し、宿泊施設で試食するイベントが昨年6

月に催されて好評を博した。安土城考古博物館などの協力のもと、これを企画・実施したのが「まんなかの会」だ。

「この時、明智光秀が家康の接待役を務めたといわれています。日本史の中で滋賀県が大きな役割を果たしてきた事実を再認識していただきたい。これが安土饗応膳の狙いであり、私たちが手

掛ける事業を貫くコンセプトです」。まんなかの会の事務局長を務める陶芸家いまいひさのりさんは話す。「近江に息づく文化や歴史の深みと出会ってもらえる“価値ある事業”を手掛け続けるつもりです」。

昨年実施した「近江戦国三昧」は戦国三傑ゆかりの史跡めぐり、和船による西の湖遊覧など内容たっぷりの2泊3日のツアー。参加者に近江文化の深さ、広さを知ってもらうことが最大の狙いだが、地元への“経済的な波及”もしっかりと意識している。まんなかの会の特色の一つがここにある。

## 近江八幡周辺の企業家が集まり 文化を深掘りしていく

地理的、文化的に“日本のまんなか”にある近江八幡やその周辺地域の魅力をもっと知ってもらおう。こんな趣旨で「まんなかの会」が生まれたのは1987年。近江牛の老舗レストラン「毛利志

満」を経営する森嶋治雄さんら近江八幡を中心に活躍する企業家仲間の集まりから発展したという。西国三十三カ所31番札所の長命寺に集まって交流した縁から、安土町の観音正寺、東近江市の石馬寺といった古刹の住職たちも参集することになった。

「地域の歴史や文化をこよなく愛する人たちの手で、近江の地が秘めた魅力を再発見し広域的に発信していきたい」。会長の森嶋さんは「まんなかの会」の活動コンセプトをこう紹介する。

現在、正会員は11社。愛荘町の老舗料理店や蔵元などに加えて、リゾート宿泊施設や水郷観光船、観光施設、ホテルなどが名を連ねる。さらに賛助会員として協力施設が天津から長浜まで広がる。「個別地域にとらわれず、滋賀全域の認知度とブランド力を高めることが目標です。それが観光振興につながれば会員の本業にもフィードバックできます。広域的な視野での“風起こし”に取り組むため、行政とは距離を置いてきました」と森嶋さん。

## 首都圏の“大人”を対象に 本物の上質な事業を展開

首都圏での「近江の認知度アップ」には特に注力している。情報発信能力



近江の酒文化を味わう手づくりツアー「旨し酒 醸し醸され 冬景色・春景色」



広域の観光スポットを“線”で紹介する「まんなかの会ドライブマップ」

が高い首都圏でファンを得られれば、2次的、3次的な波及効果を望めるからだ。2005年には赤坂の豊川稲荷東京別院で近江八幡名物の赤こんにやくを紹介するために落語「菟菟問答」を上演。また、随筆家白洲正子さんが著書「かくれ里」の中で取り上げた近江路をたどるツアーを07年から4回にわたって催した。これらの事業は「本物の文化を愛する首都圏の“大人”の目を滋賀に向けてもらう狙いからだった」。

最近では先に紹介した「安土饗応膳」「近江戦国三昧」のほか、地酒仕込みやぐい呑みづくり体験と西の湖巡りなどをセットにした近江の酒文化を味わう手づくりツアーなどの企画を精力的に実施している。「長年の努力が報われ、首都圏からの参加者が6~7割に達するようになりました。リピーターが驚くほど多く、従来の旅行ツアーにはない着地型の発想と期待以上の充実した内容が功を奏したようです」と、いまいさん。

長浜から天津に至る広域のお薦めスポットを紹介し、車でのアクセス方法も親切に掲載した「まんなかの会ドライブマップ」も発足当初から長年にわたって発行してきた。各都市の観光紹介のマップでは観光スポットが“点”になっているのを、湖東エリアを縦断する“線”へ



豊川稲荷東京別院の「菟菟問答」上演時の様子

広げて提案できたことが「まんなかの会だからできる」を象徴している。

## 他にはない発想と行動力で 観光振興の先陣を切る

「近江全体で考え、前例主義にとらわれない“自由人”の集まりだから大胆な発想ができます。サービス業の関係者が多いためか、顧客満足を考え抜いた事業を実施できるのも特色のひとつ」と森嶋さん。当会が立ち上げた「白洲正子さん関連ツアー」や「長命寺あじさいコンサート」は、質の高さが評価され今も形を変え継続開催されている。「これからも観光振興の先陣を切る役割を続けていきたいですね」と森嶋さんは抱負を語る。

まだ数字には表れていないが、まんなかの会の活動が県外の近江ファンを着実に増やし続けているのは確かだ。会員が営む旅館が「安土饗応膳」を売り物にした宿泊プランを企画し好評を得るなど、会の事業が地域経済にインパクトをもたらした事例も少なくない。

最近では歴史ツアーに若い層の姿が目立つ。「“歴史”ブームや戦国時代を舞台にしたゲームやアニメの影響だろうが、流行には媚びず、近江の文化を深掘りして事業を継続していきます」と、文化への思いをいまいさんは語る。